

パネル発表「飼育活動から広がる世界」

—総合的な学習の実践を通して—

小笠原 扶久美

1 はじめに

本校では、4年生がウサギの飼育当番を担っている。そこで、この活動を総合的な学習の年間計画に位置づけ、どっぷりとゆったりと飼育活動に浸らせる中で、子どもたちの探究心を引き出したいと考えた。

2 学習展開の構想

『子どもたちは、ウサギの飼育を通して、えさ・飼育環境・成長の様子・病気など様々な問題や興味を抱き始めるであろう。そして、そこから、「えさ対策」「快適な環境作り」「お知らせ」「健康観察」「成長記録」など、各自の興味関心に沿った課題別に探究活動を展開していけば、子どもたちの探究心も高まるであろう』

という考えのもと、本実践を行った。

ウサギへの愛着心が軸になっているため、子供たちは飽きることなく、活動にのめり込むことを期待した。そして、追究したことを他学年や他校の友達にも情報提供する表現の場も保障し、ふれあいの輪も広げたいと考えた。

なお、昨年度、現5年生も同様の実践を行っていることから、各自の問題作りの場面では、5年生との合同授業を行い、以来、アドバイザーとして援助してもらおう関係を構築した。

以下、課題別における各チームの活動の様子を記す。

3 探究活動の様子

(1) えさ対策チーム

5年生から、「野菜を育て、それをウサギが食べてくれた時がたまらなくうれしかった」との報告を受け、ぼくたちも「やってみよう」と意欲を燃やした子どもたち。「ぼくたちは、冬野菜を育てたけど、できれば夏野菜からやってみよう」とのアドバイスをを受け、6月からその活動に取りかかった。肥料は、ウサギの糞尿を利用し、循環型農業にも挑戦した。また、獣医師さんから「野草園も作ってほしい」との声もあり、プランターや校庭の片隅にレンゲやシロツメクサの種もまいた。活動する事柄がないときは、ウサギが好きな校庭の野草を調べていた。



(2) 成長の記録チーム

5年生から、昨年度、子ウサギの体重測定に取り組み、「一週間に200グラムの体重増加があった」との報告を受け、24匹のウサギの発育測定に取りかかった。個体が多すぎて、なかなかスムーズに測定ができず、予想以上に大変な作業だった。しかし、2ヶ月、3ヶ月と回を重ねるにつれ、要領よくできるようになり、1つのデータができてきていた。



体重増えたかな

そこで、このデータをグラフ化する作業へと進んでいった。それぞれ、生まれてからの月数が違うので、増え方の違いを個体別に比較することは難しかったが、夏から冬への体重変化の様子は、ここから読み取れた。どのウサギも0.2キログラムから0.5キログラムの増加があった。これは、冬に向けて、ウサギたちが体に脂肪を蓄えていることが考えられる。秋のウサギたちのすごい食欲もうなずける。継続観察の大切さや数字から判断する力や見方が、ここについてきたように感じた。



グラフにまとめよう

(3) 健康観察チーム

飼育には、毎日の健康観察が大切で、飼育日誌をつけるといいことを獣医さんから教わり、この活動に取り組んだ子どもたち。毎日、昼放課になるとせつせと飼育舎に足を運んだ。10月に「獣医さんとのふれあい教室」の中で、心音の聴き方を教わると、時々、心音を聞いては健康状態を確認することもあった。ウサギの心拍数はだいたい1分間に130回ぐらいで、その速さや音の強さを慎重に確かめていた。



心臓の音が聞こえるでしょ

そして、その音を1年生の子に聞かせてあげていた。また、図書館の本でウサギの病気等を調べ、自分のノートに克明に記録していた。

(4) お知らせチーム

低学年の子に向けて、ウサギのことを積極的に発表した。その方法は、壁新聞であったり、ペープサートでの創作物語であったり、劇化を交えたりとその子たちらしい工夫が見られた。



そして、雨の日の放課等を利用し、低学年の子を集め、楽しい会を開催した。低学年の子の喜ぶ笑顔が、さらに活動意欲を高めていた。

(5) 快適ビフォーアフターチーム



ウサギにとって、快適な環境作りを考え、その活動に励んだ。最初は、砂場や山、トンネル作りとウサギの遊び場に注目した子どもたち。

しかし、夏が近づいてくるにつれ、雨や暑さなど、ウサギにとっての快適さは、

気候が関係していることに気が付き出した。そして、屋根や隠れ家、日よけを取り付ける等工夫した。また、秋から冬にかけては、逆に寒さ対策に思考を深めた。わらの家やビニルハウスを作り、風対策、寒さ対策に取り組んだ。自分たちの作った場所や物をウサギが利用している様子は、たまらなくうれしかったらしい。



4 表現活動の様子

春、本校で生まれた子ウサギが、獣医さんの援助を受け、様々な地区の学校や幼稚園へ届けられた。そこで、そのウサギたちの近況を尋ねたところ、たくさんの小学校や幼稚園から、お手紙やかわいいウサギの絵が送られてきた。子どもたちは、本校のウサギや自分たちの取り組みの様子について、「もっと詳しく知らせたい」と考え、情報提供の方法を考えた。そして、他府県の小学校には、飼育の取り組みをパンフレットで、幼稚園児には絵本で、と想いを伝える

方法を考えた。

《幼稚園・保育園児に向けた絵本作り》

自分たちが飼育活動から得た知識や思いをどのように絵本としてまとめるのか、私にとって、とても興味深いところであった。しかも、対象が園児となると、その違いを子どもたちがどう対処するかも気がかりだ。しかしながら、子どもたちは、私の心配をよそに、嬉々としてこの活動に没頭していった。内容も、園児を意識して、「相手を思いやる」ことを説いたり、ウサギと自分を対比させ、違いがいっぱいあるけれど「好きだから友達」とまとめてみたり、ウサギの飼育から得た感情が、この本に込められていた。そのなかでも、「月のウサギ」と題し、「死」を扱った内容の絵本には、驚かされた。これは、本校のウサギが真冬に野犬に襲われて、亡くなってしまった実話をもとに作られているのであるが、「死」の後にウサギは月の世界に行き、満月の夜になると遊びに帰ってくるというストーリーであった。実際の姿は見えないが、いつまでも心の中に、ウサギたちは生きていくということ、子どもたちなりに伝えたかったのだろう。園児がどう受け取るかは別として、私としては、「死」をこのように描く子どものセンスにとっても感動した。生き物に対する情感をもとに継続飼育をしてきた意味を強く感じた場面であった。



5 実践をおえて

子どもたちの「探究心」は、対象に出会えてすぐに湧き出すものでもない。対象とじっくり、ゆったりかかわる中で、「何かしてあげたい」という思いが生まれ、そこから問題意識へと発展していくことが、本実践から見て取れた。また、1年間という長期間であったが、子どもたちの活動意欲は、尽きることなく持続していた。このことから、継続飼育の価値観を強く感じさせられた。

今後も、この経験をもとに、子どもたちの「探究心」について、さらに考えを深めていきたいと思う。

(愛知県田原市立泉小学校)